

# 第 10 回国際舞台美術展 2003

10th International Exhibition of Scenography and Theatre Architecture

堀 田 充 規



## ■ はじめに

2003年6月上旬、世界52ヶ国の舞台美術家、舞台関係者がチェコ共和国の首都プラハに集った。4年毎に開催されるPrague Quadrennial（通称PQ）舞台美術家にとって最も権威ある展覧会であり、祭典でもあろう。私もスクールセクション参加のために現地入りをした。

2002年の夏、中欧各地では雨による被害に見舞われた。エルベ川やモルダウ川沿いの街、ドレスデンやプラハは洪水によって街が浸水し、地下鉄も運行不能、国家レベルで深刻な事態をもたらした。そのため、21世紀最初のPQ開催は危惧されたが、予算削減のもと無事開催された。これは第10回のPQからの考察と報告である。

## ■ 21世紀初のPQ

プラハカドリエンナーレの沿革については、紀要23号に記しているが、その主旨は過去4年の舞台上演作品の中から、各国選抜作品の展示を行い、最も優れた展示国と舞台美術家の仕事に与えられるゴールドトリガーとゴールドメダルを競うことにある。



●産業宮殿ストロモフカ公園からの全貌

21世紀初のPQは第10回目にあたり、記念的な開催として特別な催しが数多く繰り広げられた。6月12日夕刻の関係者によるオープニングから一般公開13日～29日、前回に比べると4日間短くなっている。

場所は前回同様プラハ市街の北郊、ストロモフカ公園の一角にある産業宮殿。1891年建造の工業博覧会の遺産ともいえる、今も美しい建物での開催である。設計者はB・ミュンツベルガー、全長208m、総面積13000㎡、建物中央部分は吹き抜けのホールと高さ51mの塔がそびえている。塔の左右は八つのアーチが連なり、外光を充分に取り入れる事ができ、建設当時は人々に新しい建築の感動を与えたという。2002年の洪水はこの小高い丘に建つ産業宮殿ぎりぎりにまで及んだ。

今回の特別な催しとして、The Heart of PQと名付けられたパフォーマンスプログラムが中央ホールで開催。作品展示は左右のウィング部分に限られた。図1の詳しい平面図を見て頂きたい。

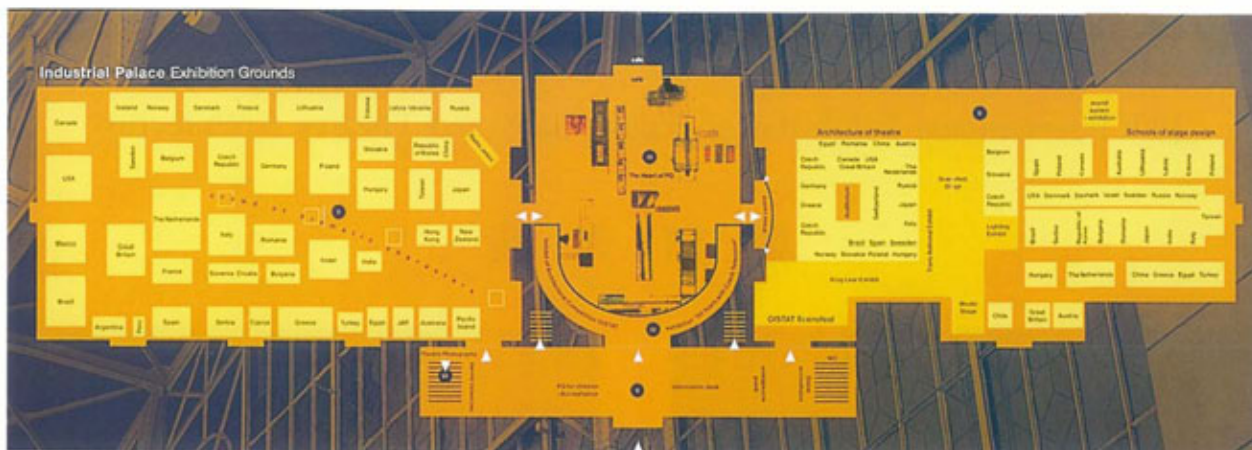
主催：PQ 2003 実行委員会

後援：チェコ共和国 大統領 Vaclav Klaus

Organized チェコ文化省/UNESCO

co-operation The City of Prague

実行委員会：The Theater Institute Prague



●会場平面図

General Commissioner / Jaroslav Malina

Director / Ondrej Cerny

General / Manager Petr Oukropec

11名の審査委員 参加 52カ国

アルゼンチン/オーストラリア/ベルギー/ブラジル/  
ブルガリア/チェコ/中国/デンマーク/エジプト/  
エストニア/フィンランド/フランス/香港/チリ/  
クロアチア/インド/アイスランド/イタリア/イスラエル/  
日本/南アフリカ/カナダ/韓国/キプロス/リトアニア/  
ラトビア/ハンガリー/メキシコ/ドイツ/オランダ/  
ノルウェー/ニュージーランド/パシフィックアイランド/  
ペルー/ポーランド/オーストリア/ルーマニア/ロシア/  
ギリシャ/シンガポール/スロバキア/スロベニア/  
アメリカ/セルビア&モンテネグロ/スペイン/  
スウェーデン/スイス/台湾/トルコ/ウクライナ/  
ウズベキスタン/イギリス

前回の 47カ国を上回り、エジプト、インド、ペルー、シンガポール、セルビア&モンテネグロ、クロアチア、トルコ、台湾、ウクライナ、ウズベキスタンの国々が初エントリーである。アジア圏の進出が増えた。

◆第10回プログラム 6月13日~29日/10時~19時

- I National Exhibition (ナショナルセクション)
- II Theatre Architecture (劇場建築セクション)
- III School of Stage Design (スクールセクション)
- IV OISTAT Scenofest (OISTAT セクション)

V The Heart of PQ (スペシャルプログラム)

VI Accompanying Events (サイドプログラム)

The Heart of PQと題した Interactive Performance にはスペシャルプロジェクトチームが生まれ、世界各国へ呼びかけられた。その為のイベントステージを会場の約5分の1を占めるセンターホールに設営。

International, interactive, exhibition of senses and contaminated performance と題して、毎日 10:00am-6:00pm 各国のパフォーマーが上演。

- ◆ Tower of Smell / Mokey's Wedding Theatre Company (JAR)
- ◆ Memory Wall / MAU Dance Company (NZ)
- ◆ Alchemic Ber / Akhe Group (RUS) / optical theatre
- ◆ Roaming Taste / Kyzyl Traktor (KAZ)  
fine arts - nomadic theatre
- ◆ Blindtower / Les Productions Recto-Verso (CAN)  
technologic theatre
- ◆ Touch tower / Carol Brown (GB) / dance
- ◆ Listening Tours' new media interfaces -  
Sachiyo Takahashi (JAP) / sounddesign  
Ryuzo Fukuhara (JAP) / BUTO

そして、The Sixth Sense of Taste なる演目。人間の五感をテーマにした空間造りと、さらに第六感に訴えようとする試みとイベント構成がユニークだ。だがこれはプログラム等をしっかり把握していないと、現実はその場に居合わせてもステージやキッチンスペー

ス、その周辺に置かれた品物達が意味有りげではあったが、具体的なテーマ性が誰にでもすぐ伝わるわけではなかった。

上記のプログラムの他に Further Programme として、13日から26日まで世界各国のパフォーマンスやレクチャー、ワークショップが繰り広げられた。

また関連プログラムには次の団体の参加記録がある。

- ◆AICT - (International Association of Theatre Critics)
- ◆ASSITEJ - (International Association of Theatre for Children & Young People)
- ◆FIRT - (International Federation for Theatre Research)
- ◆OISTAT - (International Organisation of Scenographers, Theatre Architects & Technicians)
- ◆SIBMAS - (International Society of Libraries & Museums for Performing Arts)

FIRT こと国際演劇学会は 18～22 日の期間、Conference of Scenography- “Patronage, Spectacle and Stage” について会員だけのイベントを開催している。

次にテーマごとの展示について整理しておきたい。



●ハート・オブ・PQ/カザフスタンのパフォーマンス

## ■ National Exhibition : competitive section

展示スペースは各国予算に合わせて購入するのだが、47 カ国参加中、オランダが最も広いスペースを有していたのは前回同様である。昔から芸術に市民レベルで理解あるお国柄であろうか？ ついで、ドイツ、ポーランド、ブラジル、イギリス。最も小さいスペースだったのは初参加のチリであった。

各国出展デザイナーの人数は以下である。

アルゼンチン 7 名/オーストラリア 19 名/ベルギー 8 名/  
ブラジル 8 名/ブルガリア 21 名/チェコ 14 名/中国 7 名/  
デンマーク 15 名/エジプト 6 名/エストニア 3 名/  
フィンランド 4 名/フランス 2 名/香港 4 名/チリ不明/  
クロアチア 13 名/インド 1 名/アイスランド 1 名/  
イタリア 6 名/イスラエル 15 名/日本 11 名/  
南アフリカ 4 名/カナダ 20 名/韓国 2 名/キプロス 4 名/  
ラトビア 1 名/ハンガリー 20 名/メキシコ 6 名/  
ドイツ 6 名/オランダ 9 名/ノルウェー 1 名/  
ニュージーランド 10 名/パシフィックアイランド 2 名/  
ペルー 1 名/ポーランド 11 名/ルーマニア 25 名/  
ロシア 1 名/ギリシャ 6 名/シンガポール 不明/  
スロバキア 1 名/スロベニア 1 名/アメリカ 65 作品 8 名/  
セルビア&モンテネグロ 7 名/スペイン 17 名/  
スウェーデン 4 名/台湾 9 名/トルコ 4 名/  
ウクライナ 2 名/ウズベキスタン 1 名/イギリス 23 名/  
総計 369 名+ α

参加者の最多はルーマニアの 25 名、イギリス 23 名、ブルガリア 21 名、カナダ、ハンガリーの 20 名、アメリカは 8 名に絞っての参加だったが 65 作品を出品、その実力を充分に発揮していた。

出品に際し、過去 4 年の上演作品である事以外は各国の団体に任せられている。日本は今回「海外とのコラボレーション作品」という定義で募集、11 名に絞られた経緯がある。最多出展者に高田一郎氏と板坂晋治氏らの作品があった。

ロシアは大国ながら、Boris Messersr 氏一人だけの回

顧展示。ボリス氏のカラフルな作品の中にロシアの算盤を大きな風車に改造、沢山の空瓶を使用した不思議なオブジェ作り、シャープさは無いものの人を引き寄せるブースに仕上がっていたと言えるだろう。ラトビアも Blumbergs Ilmars 氏一人のオペラ「魔笛」一作品の出展。飾っていた人型の造形物やブースは異形を放っていて、強く印象に残るものであった。どのようなコンセプトで人体が「魔笛」のモチーフになったのだろうか？研究者として非常に興味深いデザインであった。

ところで、デザイナーの参加数が多ければ質が高いという訳ではないが、イギリスは今回も質の高い出展であった。各国の展示内容は上演写真、デザイン画に模型作品、舞台上で使われた原物の一部、コンピュータ上の上演もあれば、舞台衣装の原物などが飾られるものがあった。今回はかつてない“Crowd of Dramatic Characters”と題したコスチューム展示レーンが設置され、各国の舞台衣装が一堂に展示。個性的な衣装がずらりと並んだが、それがどこの国の何の作品であるのかが判りづらく、各国ブースでも衣装を飾る所があり、ギリシャブースなどは際立った衣装展示であった。

また他方で質の高い作品を飾っていても、ブース展示に特徴がなかったり、平面作品だけでは印象が薄くなるのは否めない。逆に上演作品の内容はともかくも、ブースに特徴があって、強く印象に残るものもある。今回のハンガリーがそうであった。それは大きなキューブを斜めに持ち上げたように造られ、キューブの中に入ると、平衡感覚が揺らぐ体験を呼ぶもので、同行した多くの関係者や学生達の評判となった。

本来舞台美術のデザインを競う PQ であるが、このように体験させる事も舞台美術の仕事の一つであるに違いない。だがこのハンガリーの美術家の作品は、そのキューブ内に貼られた写真や図面で、多くの人がほとんど印象に残っていないと語った。あまりに特異な空間を造り、個々の作家の作品の印象を飛ばしてしまったようだ。これでは本末転倒であるかもしれない。

その点初参加の台湾ブースはデザイン雰囲気とも優れ、ここの作家の作品展示も見やすく予算をかけた事が一目で判り、アジアの出展国の中では際立っていた。

さて日本は残念ながら、厳しい予算の中での出展。十分な費用をかける事が出来ず、渡航参加した学生達



●ロシアブースはボリス・メッサラ氏の回顧展



●コスチュームレーンに飾られた舞台衣装の数々



●ラトビアブースは人体をモチーフにしたセット展開



●アジアテイスト溢れる台湾ブース



●右手前の白い造形はハンガリーブース、最奥にギリシャブースの衣裳が見える



●ギリシャブース



●台湾ブースを借景にした日本ブースと割り箸のオブジェ



●黒で統一したイギリスブースと赤い造形物はオランダブース  
●右写真はスロベニアブースに置かれた、オディブスレックスでのオブジェ、あるいは装置

が展覧会場で、日本から持参した割り箸と輪ゴムによるオブジェを制作し、ブース中央に設置。輪ゴムと割り箸で器用に立体化していく作業や、割り箸の存在とその細い木片が空間を埋めていく行為が、他国の人々の眼に非常に面白く映ったようで、制作中にそれを見学したり、撮影する人達が後を絶たなかった。これは低予算の中で日本ブースを何らかの形で表現したいと、コミッショナーの石井みつる氏による発案である。スクールセクションに出展した4大学（大阪芸術大学、武蔵野美術大学、玉川大学、多摩美術大学）の渡航した学生の中の有志が大活躍した。

その他、ブラジルやオランダは予算をかけた二階建てブース。特にオランダはコンピューターを多数設置

し、来場者に映像を見せる事も出来れば、様々なアプローチ展開。ブラジルが用意していた無料のパンフレットは、他の国のどこよりも費用をかけた物で、立派な本といった代物であった。ギリシャの物も豪勢であったが、これはブックコーナーで販売。他に質の良い無料パンフレットを配布していたのは、ロシア、キプロス、スウェーデン、香港はCD-Rを配布していた。

今回気付いたことの一つに、参加デザイナーは出身国としての参加ではなく、所属している舞台美術家団体の国別であるということ。つまり今現在住んでいる国で、その国の舞台美術家として活躍しているという事になる。アメリカのデザイナーにはUSA 出身者もいれば、ドイツやイギリス、ユーゴスラビアといった出身者がいた。出展作品の上演場所は他国であってもよいので、イギリスのブースではアントニー・マクドナルドの模型作品が目をつけたが、それは1999～2000年に話題となったオーストリア、ブレゲンツの湖上セットであった。あくまで、デザイナーの作品を中心に、国別の出品である。

ところで、オープニングセレモニーは例年屋外、会場前の広場で開催されていたが、第10回は屋内ホールの特設会場で、招待状を持つ者だけで開かれた。出品者であっても入場出来なかった者が多数、日本からはコミッショナーだけが参加し、その様子は音楽とパフォーマンスで始まり、就任間もない新大統領ヴァーツラフ・クラウス氏やプラハ市長も参加、華々しい開催であったという。約90分あまりのセレモニーの後に一般関係者が入場すると、例年はない食べ物やドリンクサービスがあつて、ホールはすっかりパーティ会場と化していた。

翌日からナショナルセッションでは、ナショナルディと呼ばれる交流会が1日5～6ヶ国順次開催。各国のブースで約1時間のもてなしが繰り返される。日本はセンターホールの舞台上で、スクールセッションに参加した4大学の学生達（自由参加）が割り箸を立

体化する作業を始め、ハート・オブ・PQ参加アーティスト



● ジャパンディのイベントに参加した学生達



● 劇場建築/イタリア、ザ・パーク・オブ・ミュージックの模型

ストの高橋サチヨさんが横笛を吹き、パフォーマンスで参加した日本大学芸術学部の学生によるダンスで幕を切った。割り箸オブジェを手に持ち、学生達が舞台からブースに移動すると、日本酒や日本のおつまみを振る舞い、来場者とジャンケンによる日本グッズのプレゼントで交流を深めた。パフォーマンスの成果とジャンケン大会で、今回のジャパンディは大盛況であり、参加した学生が神妙な様子でパレードしていたのが印象に残った。

このナショナルディは27ヶ国が開催、その多くが展示仕込みの参加関係者が滞在している初日から5～6日の期間に終了してしまう。

## ■ Theatre Architecture : competitive section

劇場建築セクションー参加 22ヶ国。ブースでは13日～20日の期間、講演やセミナーが行われた。人数が記入されているのは公式カタログの記録からである。ブラジル4名/チェコ/エジプト5名/イタリア1名/ハンガリー8名/ドイツ use of buildings for theater/ロシア5名/ギリシャ4名/スロバキア1名/オランダ8名/ノルウェー1名/ポーランド6名/スペイン2名/アメリカ13団体/スウェーデン3名/スイス2名/イギリス2名/52名+13団体+ α

この他に、ルーマニア/中国/オーストリア/カナダ/日本がプログラムの平面図に記載されているが、これらの国はカタログ記載に間にあわなかったようだ。舞台美術の模型とは一味違う大がかりな建築模型の展示、中でも規模の大きな模型で一際目立っていたのはイタリアの人気建築家レンゾ・ピアノ氏のザ・パーク・オブ・ミュージックであった。

その他に興味深かったのは、スウェーデンの石切場の採掘跡を利用した屋外劇場。開催国チェコは、2002年の洪水による、浸水した旧市街の劇場報告展示となった。劇場建築セクションでは写真や図面展示の他に映像上映などもあり、カナダの劇場技術業者は CD-R を配布、自在に観客席を操る映像をドラマティックに仕上げていた。

## ■ OI STAT SCENOFEST

通常のスクールセクションの他に今回は OI STAT SCENOFEST と題し OI STAT (世界劇場機構団体) がホストを勤めたコーナーが設置。そこでは予め出題されていたテーマに則って出品展示がなされ、2名によるレクチャーと8名のプレゼンテーションがあった。

◆A Lear for Our Times 39校44作品

◆Trans-national Exhibit

◆Design As Performance 19 テーマ

◆Lighting Design 12 Presentation

◆Sound Design 19 作品

◆Puppet Deys 8 作品

中でもイギリスの舞台美術教育者である、パメラ・ハワード女史が企画した“A Lear for Our Times”は大変興味深いコーナーとなっていた。世界各国の44作品の学生達が考案した「リア王」の上演プラン、舞台に限らず街中や、上演にふさわしい場所に組まれたセットの模型等が、一堂に飾られるのは面白い試みであった。またこの企画は単に展示するだけではなく、質疑応答が必須であった。

スペースはスクールセクションほど広くないものの、プログラム上は参加学生と演出家や舞台美術家との活発なディスカッションが持たれた。まさに参加学生にとっては生きた学習であったと、日本から参加した玉川大学の副手と大学院生から帰国後報告を聞いた。ナショナルもスクールセクションも、一つの戯曲にこだわって展示するものではない為、比較研究する事は容易ではないが、少なくともシェークスピアの「リア王」に限れば、観客にとっても比較して見ることが出来て、興味が深まるに違いない。



●セノフェストのリア王

## ■ School of Stage Design :

### Non-competitive section

スクールセクション —参加 36 カ国 124 校+α  
オーストラリア 3 校/ベルギー6 校/ブラジル 2 校/  
ブルガリア 3 校/チェコ 2 校/中国 2 校/デンマーク 1 校/  
エジプト 1 校/エストニア 1 校/フィンランド 2 校/  
チリ 1 校/インド 1 校/イタリア 1 校/イスラエル 3 校/  
日本 4 校/カナダ 15 校/韓国 7 校/リトアニア 1 校/  
ラトビア 1 校/ハンガリー 1 校/ドイツ 2 校/  
オランダ 5 校/ノルウェー 2 校/ポーランド 4 校/オース  
トリア 1 校/ルーマニア 2 校/ロシア 1 校/ギリシャ 1 校/  
スロバキア 1 校/スペイン 1 校/  
セルビア&モンテネグロ 1 校/トルコ 1 校/  
アメリカ 23 校/イギリス 21 校/スウェーデン不明/  
台湾不明/ 前回より約 20 校増えている。

スクールセクションはナショナルと比べてみて、型にはまらぬ面白さがあると言ってよいだろう。プロ並みの作品展示をしているブース、非常にコンセプチュアルな所もあり、教室を思わず展示など、**Non-Competitive** ということもあって、各国自由奔放まあまりのなさが魅力でもある。

ここでもオランダは最も広い展示スペースを確保、二階建てによる規模、作品展示というよりも学生達のラボ的な空間を創っていた。雑多な物を数多く並べたり、パソコンを設置して、ナショナルセクション同様の展開を感じさせた。

スクールセクションは、国別または学校別の展開であるが、1 校でコンセプチュアルなブースを創りあげる国もあれば、アメリカは 23 校もの参加展示。23 校の作品をそれぞれ旅行用のトランク 1 個ずつに詰めて見せる方法。つまり空輸の問題を含めてトランク、またはトランク型にして、ただ詰め込むだけではなく、開ければすぐショーウィンドウ化していたり、引き出すタイプなど各校中味と工夫はバラエティに富み、ブースに所狭しとトランクが口を開けて来場者を待つ

ていた。

そうかと思えば、イギリスは広くもないスペースに、21 校選り抜きの模型作品や衣装を飾り、すっきりと洗練した空間創りに成功していた。ハンガリーも模型作品には勢いが感じられたし、ブラジルも学生らしいブース展開であった。

他に目を引いたのはギリシャで、白い空間に一つの赤いオブジェを設置、赤い塔のようなオブジェの中には様々な作品が納められていた。その中の作品の一つに、近代演劇の歴史的なロシアの舞台装置の模型もあり、研究者には興味深かった。古代ギリシャ演劇は世界の演劇に影響を与えたが、現代のギリシャの舞台美術教育の中では、ロシアの近代演劇を無視する事が出来ないようだ。

前回同様に力が入っていたのは韓国、そして初参加の台湾。韓国芸術大学は KNUA と記した立派なパンフレットを配布して、参加学生も多く活気があった。フィンランドは学生の個人作品の存在はほとんど窺えなかったが、木造のサウナルームを想像させる空間創りが印象深い。デンマークはインスタレーションによる展開、舞台美術からは少し離れた物になっていた。イスラエルは今回も巨大な模型に物を言わせていたが、前回ほどの迫力は感じられなかった。

ポーランドは入口を黒いカーテンで遮り、中に入ると天井と壁は一面鏡、ショーケースのように衣裳や人形、平面作品を吊り下げて、鏡による連鎖がミラクルな世界を創り、異質な雰囲気を漂わせていた。作品も鏡の空間に負けない力作であった。

スマートに決めていたのはベルギーとスペインである。ベルギーはエリアいっぱい巨大な本を床置きして、(その本の) ページをめくると作品が立ち上がったたり、天井から模型作品が降りてきたりと、ちょっとした舞台の仕掛けを持ち込んでいた。演劇の舞台美術を考える上で最も大切な本から作品が生み出されることを具現化したかたちで、学生達にも評判を呼んだ。スペインは 1 校だけによる展開、模型も衣裳の実物もな





●ルーマニアの模型作品



●アメリカブースのトランクの中の作品



●ギリシャブースと習作の模型作品



●ベルギーブースは昇降装置付き



●デンマークブース



●イギリスの模型作品



●ポーランドブースの中は一面鏡



●スペインブース



●日本ブース、大阪芸大の作品

く、仕切の壁にモニターテレビ、整然と並ぶ数多くの立方体を串刺にした柱。立方体には照明が内蔵、プリントされた舞台写真が浮かび、その雰囲気はスクール離れしていた。

さて日本は前回のまとまりのなさの反省から、参加4大学の担当教員が開催の1年余り前から会議を持った。OISTATが「現代のリア王」のテーマで作品を募集するとの情報から、4大学統一テーマを「権力の崩壊」として取り組んだ。玉川大学と大阪芸大は具体的な戯曲で（マクベス、リア王など）デザインした作品を持ち込み、多摩美術大学と武蔵野美術大学はインスタレーション的な作品展示をしたが、ブース全体の雰囲気が前回より優れたものであったかは疑問が残る。

前回はまとまりがないものの、何がしかの活気があった。けれど、今回はそれがあまり感じられなかったように思う。前回はコンテナ輸送で比較的大きな模型や衣装を持ち込むことが可能だったが、今回は予算面の問題で模型は手持ちで運べるサイズにし、参加関係者や渡航参加者の手で持ち込まねばならなかった。予算がなくても良い展示が出来るよう工夫したいものだが、4大学が協議して納得のいくブースを創るには舞台美術家協会の協力がもう少し必要だと感じた。今回は逆に学生達がナショナルセクションに、大きく貢献する結果となった。

## ■各賞受賞結果

### ＝ナショナルセクション＝

<ゴールドトリガー>（金賞）／イギリス

<特別銀賞>

オランダ／展示における現代的アプローチ

ロシア／ブースに展示しているボリス・メッサーラの回顧作品の多様性

台湾／ブースに表れている国の独自性

スロバキア／ブースをアレス・ボダバ展にする選択をした無私心性

<名誉賞あるいは敢闘賞>

カナダ／ブースにおける明確さと愛国精神

ギリシャ／ブースと展示作品の質の高さ

ニュージーランド／ブースの持つ演劇的な感性

アメリカ／展示作品の国際性とそのまとまりの良さ

<舞台美術金賞> リチャード・ハドソン（イギリス）  
オペラ作品「タメルラーノ」

<銀賞> ジョージオス・パサス（ギリシャ）「ペルサイ」

<名誉賞> ハリス・カフカリデス（キプロス）

「フェニックスの女達」

ジョージ・バリーナ（メキシコ）

（コペンハーゲン）含む複数作品

<舞台衣裳金賞> ニッキー・ギリブランド（イギリス）  
「夏の夜の夢」

<銀賞> タージャ・シモネン（フィンランド）「女鹿と犀」

<名誉賞> チャン・フェ・サク（韓国）「魔笛」

ディオナ・レビンサ（ルーマニア）複数作品

<作品金賞> 「エレクトラ」（オペラ）（スウェーデン）

美術 ラーズエーク・テスマン

衣裳 カレン・アースキン

<銀賞> 「魔笛」（ラトビア）

美術／衣裳 イルマーズ・ブランバーグス

<名誉賞> 該当者なし

各ゴールドメダルには1000US\$の賞金が与えられる。

### ＝劇場建築セクション＝

<金賞> イタリア／建築家 レンゾ・ピアノ

劇場 パルコ・デラ・ミュージカ（ローマ）

<銀賞> スペイン／建築家 フランシスコ・ガーディア

ヌネズ・ヤノースキー

劇場 ルイレ・テアトレ（バルセロナ）

スイス／建築家 ローリッツ・オートナー

マンフレッド・オートナー

劇場 シフボウ（チューリッヒ）

<名誉賞> ロシア／建築家 A・ヤシリブ、S・グサレブ

I・ポポブ、B・トアー

劇場 スクール・オブ・ドラマティック・

アーツ (モスクワ)

<名誉賞> スウェーデン/全体的な展示作品に対して

以上が受賞者リストである。(解説文は日本舞台美術家協会のホームページからの転載である。)

審査員は11ヶ国11名による審査、日本の畑野一恵さんもその一人であった。受賞リストを振り返ってみて、なるほどイギリスは質の高い作品を平面展示と模型展示とをバランスよく、来場者の視線を考慮した見易い方法を取っていた。キュレーターと展示デザイナーを兼ねていたのはPeter Ruthven Hall氏である。

個人の最優秀作となるゴールドメダルはイギリスのリチャード・ハドソン氏の作品であったが、彼は現在世界で最も注目されている舞台美術家の一人である。すでに1999年のゴールデントリガー、ローレンス・オリビエ賞、トニー賞、ロサンジェルス批評家賞、ハリウッドNACCP賞と名誉ある賞を数々受賞、1954年ジンバブエ生まれ。イギリスブースの中でも、最も印象に残る装置の一つであった。舞台上に白い大きな球体一つと、それを踏むかのように白い足先(足首から下の裸足の片足)主にそれだけの構成であるが、球体と足が常に舞台中空にある美術であった。これら受賞作品の多くはPQのホームページで見ることが可能だ。

ナショナルセクションの受賞結果を見ると、費用をかけたブースだけが受賞しているわけではないが、オランダや台湾は費用を掛けたからこそ、受賞したと言えよう。

## ■まとめ

4年ぶりのPQは水害にもめげず、活気ある開催であった。世界3262人の関係者がPQ企画、設営、運営に携わり、各国からの見学来場者数20000人。140人の国内外から記者が取材したと発表された。

今回は美術デザインだけでなく、舞台衣装レーンを設置したことで、例年とは会場の雰囲気の変化したよ

うに思う。けれど、マネキンに舞台衣装を着せて並べるのが良かったのかは疑問が残る。本来劇的な空間で役者達が着る衣装をマネキンに着せて並べると、デパートの洋服売り場のような感じを受けたのは私だけだったろうか? 実際舞台衣装部門で受賞したイギリス、ギリシャ、キプロス、韓国は自国のブースに飾っていた。作品そのものの質が良ければ、展示場所がどこであろうと構わないようなものだが、舞台衣装は劇的な空間で生きるものである。それをひとまとめに並べると、意味あるキャラクターの存在も曖昧になって結局の所、自国ブースに納得いく飾り付けをした方がアピールしたのではないか。

すでに上演されたものを競うPQでは、展示方法は慎重に検討し、よい見せ方をしなければ、余りに多くの作品の中よく見てもらえない。写真やデザイン画よりも模型の方がアピールするし、模型作品の見せ方も照明を内蔵する方が見やすい。イギリスやアメリカの作品は、限りなく舞台空間の雰囲気を出すよう研究され、日本のそれにはあまり見られない、登場人物のミニチュアやシルエットを模型の中に取り込み、上演時の様子を伝える努力をしている。今後は益々そういった傾向に進むであろう。

映像で見せる国や作品もあるが、映像になると上演作品を見せるケースが多く、そうすると舞台美術を純粹に見ることからは少し遠のいてしまう。前回のドイツはすべて映像作品にして見せたが、今回は模型やデザイン画に立ち戻った感があった。

また、上演された世界各国の舞台美術を審査するのは容易ではないはずだ。条件がそれぞれ違うし、何より戯曲の分析や演出家とのコラボレーション、そして予算的な問題。それら総てを分析した上で、審査されているとも思えないが、今後の舞台芸術の発展と可能性を予測できる受賞と理解したい。リチャード・ハドソン氏の作品を見ると、その戯曲を読みたいとなるし、その上演舞台を観たいと思わせた。ブレゲンツの「仮面舞踏会」にしても、オペラを知らない学生達に是

非観たいと言わせる作品の力が備わっていた。

舞台美術は写実から象徴化する傾向はますます強く、より造形的な空間創造へと進んでいるが、我が国において、それはもう少し時間を要するだろう。なぜなら、そういった象徴的、造形的な舞台芸術を支持する観客が日本では十分に育っていないと感じるからだ。教育現場で仕事をする我々は専門家を育成するだけでなく、好奇心旺盛な観客を育てることも大事な仕事のひとつであろう。

## ■おわりに

2003年の夏も欧州は異常気象であった。チェコ人いわく90年振りとも、140年振りともいう猛暑に見舞われた。エアコン設備を持たない古い建物が多いプラハでは、PQ会場も当然クーラーはなく猛烈な暑さであった。涼しいヨーロッパの6月を想定していたが、日本よりずっと暑い毎日で仕込みをするのも、会場を見て廻るにも厳しい暑さを辛抱しての日々であった。

95年からPQにかかわって、今回2度目の仕込みと研究の為の渡航であったが、我が校では授業期間ということもあり約1週間での渡航。仕込みは2日間、オープニングセレモニーの参加、ジャパンディの参加とプラハに滞在中はほぼ毎日会場に通っていた。単に出来上がった作品を鑑賞するだけでなく、各国の参加者と共に仕込み準備をする作業もまた面白いもので、国によってその作業の進め具合は違う。渡航した学生は、またと無い体験とその体験から多くのものを吸収したに違いない。各国の有りとあらゆるデザインワークを見て、目から鱗を何枚も落としたと語ってくれた学生もいた。

この国際展に授業の一環として渡航参加している学校もあり、大学や専門校でなければ参加出来ないスクールセクションは舞台美術を学ぶ者には大きな魅力である。出展に際し、出品料など多くを支援して下さい

た塚本学院、大学関係者にこの場を借りて感謝申し上げます。出来ることならば今後、大阪芸術大学からPQへの渡航計画が認めて頂けるようになることを願う次第です。

## 参考資料

PQ公式カタログ/1999 PQ公式カタログ/2003

プラハ建築の森 田中充子著

[www.pq.cz/](http://www.pq.cz/)

[www.jatdt.com/](http://www.jatdt.com/)